

[センター15周年・研究科10周年記念号によせて]

足場を確認しつつ前進を

池田光幸

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科開設10周年お目出とうございます。研究科開設に携わった者の一人として感慨一潮のものがああります。職場を離れた後、臨床とは全く離れた日々を過ごしてまいりましたが、折に触れ仕事をしていた頃の自分や臨床実践について振り返ることがああります。そんな時に思い抱くことをお伝えして日々臨床に精励、活躍しておられる諸兄姉へのお祝いの詞といたします。

研究科を去って3年、未だそれ程長い時間が経ったわけではあありませんが、この間仕事に就いては体験し得ないことを随分して参りました。四国八十八ヶ所霊場の徒歩巡り、小豆島での数ヶ月の古民家暮らし、フィリピンの小島シキホール島での滞在や古都ローマ観光、また家に在っては通信庭園技能講座を受講しながらの草木の手入れ、そして日本古代史や古典を繙き古文書を少しずつ学ぶことなどです。意識的だったわけではないのですが、結果的にこれらには二つの方向づけがあったように思います。一つは自然に触れるということ、もう一つは歴史を学ぶということです。どちらも積年の臨床活動の中で不明明になっていた自己の立つ地平を明らかにし、安定感を回復するのに役立ったように思います。

在職中は小生も一人の心理臨床家として目のクライアントにエネルギーを集中させる作業を長年続けて参りました。しかし臨床実践は集中すればする程ややもすれば臨床家自身の現実感覚を希薄にする、自己の立つ地平を不明明にする危険がああります。小生が定年まで数年を残して職を辞したのも多事多端の中で疲労したこともあありますがこの積年の一点集中作業による無方向感があありました。どうにも前に進めない感覚、集中困難、特に臨床関係の論文は一行も前に進まない感覚です。それがこの三年間臨床を離れて多様な体験をする中で少しずつ改善して参りました。三月から四月にかけての四国寺巡りは特に役立ったように思います。春の暖かい日射しと生き生きとした命の芽吹き、そして長い年月永々と続いてきた人間の営みに直接触れる感覚を味わいました。それは霧の中に美しい草木が次第に姿を現すような、夜の帳の中で明かりが強まっていくような感覚でした。この変化は次のように言っても良いかもしれません。クライアントの内界に集中している時に気付かなかったけれどフト回りを見渡せば自分もクライアントも明かるい太陽の光の中にあることの発見、周りは緑と命が満ち光が充満していることの気付きとも言えます。また連続と続く命の連鎖の一局面を今自分が生きているとの感覚です。未だ充分に自分の中に根付いたとは思えませんが、もしこのような感覚をしっかり持ってクライアントに向き合うならば無方向感などはきっと味わうことはないでしょう。眼前は仮に闇であっても遠からず光が戻ることを確信できるからです。北国では光が弱まり緑が消えても南国には燦々とした太陽の光があるのです。冬期にシキホール島や小豆島で過ごすことで膚で直にそのことを味わいました。その中でこの確信が少しずつ育ってきたように思います。仕事をしながらこのような体験をすることは現実には困難かもしれません。しかし身近な所で自然に触れた歴史に思いを馳せることはできます。臨床心理学は心という眼に見えないものを扱うのですから光や緑、あるいは時間の流れについてしっかりした感覚を持たずには方向感覚を失う危険がああります。クライアントに集中する中、時に眼を転じ、身を移し、足場を確認するように心懸けることが長く臨床に生きるために必須のこのように思われるのです。

同輩諸兄姉の末永い御活躍と研究科の益々の隆昌を折念してやみません。